

## 2019 年度事業報告書 附属明細書

附属明細書 1 会員一覧

附属明細書 2 主催セミナーに関する事項

附属明細書 3 留学生会館入居状況

附属明細書 4 留学生論文の表彰に関する事項

## 会員一覧

2020年3月31日現在

No.	協力会員名称	No.	協力会員名称
1	埼玉大学	26	東京工科大学
2	千葉大学	27	東京都市大学
3	東京工業大学	28	東洋大学
4	東京外国語大学	29	日本女子大学
5	東京学芸大学	30	法政大学
6	東京農工大学	31	明星大学
7	お茶の水女子大学	32	立教大学
8	電気通信大学	33	立正大学
9	一橋大学	34	早稲田大学
10	国際教養大学	35	東洋英和女学院大学
11	首都大学東京	No.	準協力会員名称
12	青山学院大学	36	東京工業高等専門学校
13	桜美林大学	37	白梅学園短期大学
14	大妻女子大学	No.	賛助会員名称
15	慶應義塾大学	38	(株)幼体連スポーツクラブ
16	工学院大学	39	(株)スリーボンド
17	国際基督教大学	40	安藤物産(株)
18	駒澤大学	41	多摩信用金庫
19	芝浦工業大学	42	大成建設(株)
20	順天堂大学	43	相羽建設(株)
21	上智大学	44	第一屋製パン(株)
22	創価大学	45	ハウコム(株)
23	中央大学	46	
24	帝京大学	47	
25	東京経済大学	48	

事業名	第1回アメリカセミナー								
期日	9月28日(土)～9月29日(日)								
主題	変動する世界とアメリカ								
対象	大学生、社会人								
趣旨	<p>今日アメリカには根本的な変化が起こりつつある。これまでアメリカは「リベラルな世界秩序」の盟主を自負し、その関与の度合いやあり方に濃淡はあったものの、世界秩序への関与そのものを放棄することはなかった。そのアメリカに、「米国第一」を掲げ、気候変動対策のためのパリ協定など、様々な多国間協調枠組みに背を向け、露骨に国益を追求するトランプ政権が誕生したのである。トランプ政権は、世界秩序に関心を持っていない。民主主義や人権など、従来アメリカ外交が一その実践には数々の欺瞞があったにせよ一目標として掲げ続けてきた価値観にも関心を持っていない。国内でもトランプ政権は、報道の自由や人権など、憲法が定めるところの基本的な価値をさまざまに蹂躪している。トランプ政権に対し、当然メディアは批判を強めている。しかし他方で、トランプにいかなる批判が寄せられても、むしろメディアに叩かれるからこそ、強固に支持し続ける「岩盤支持層」も存在する。</p> <p>アメリカは今後どうなっていくのか。アメリカの政治外交をよりよい方向へと軌道修正していくために、メディアや市民、国際社会、同盟国である日本は何をすべきか。トランプのアメリカについて考えることは、単にアメリカという一国の問題を超えて、民主主義や人権という人類がこれまで育んできた基本的価値の行方について考えることでもある。アメリカのいまを知りたい人のみならず、世界秩序と地球の行方に関心を持つ人の参加を広く歓迎する。</p>								
講師	<p>三牧聖子(高崎経済大学経済学部国際学科准教授)**</p> <p>前田幸男(創価大学法学部教授)**</p> <p>五野井郁夫(高千穂大学経営学部教授・国際基督教大学社会科学研究所研究員)**</p> <p>高木徹(NHKグローバルメディアサービス国際番組チーフ・プロデューサー)**</p>								
定員	60名								
参加者	54名								
アンケート結果	<p style="text-align: center;"><b>セミナーの満足度</b></p> <table border="1"> <caption>セミナーの満足度</caption> <thead> <tr> <th>満足度</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>満足</td> <td>77%</td> </tr> <tr> <td>どちらかという と満足</td> <td>16%</td> </tr> <tr> <td>無回答</td> <td>7%</td> </tr> </tbody> </table>	満足度	割合	満足	77%	どちらかという と満足	16%	無回答	7%
満足度	割合								
満足	77%								
どちらかという と満足	16%								
無回答	7%								

\*\*印は企画委員を兼ねた講師

事業名	憲法を学問するⅣ										
期日	11月30日(土)～12月1日(日)										
主題	近代立憲主義とポスト現代国家										
対象	大学生、社会人										
趣旨	<p>最もなじみがあるにもかかわらず、実は非常に勉強しにくい法である憲法。学校や報道を通じてすでに知っている気でも、「もっと突込んで、憲法のほんとうの意味を正しく理解しようという段になると、にわかにおそろしくむずかしくなる」(清宮四郎)のです。そこで、大学セミナーハウスの発案により、一般の市民や学生が、第一線の研究者と直接に交流し、ともに学び考える合宿セミナーが企画されました。それが「憲法を学問する」です。2016年6月に行われた記念すべき第1回セミナーの内容は、樋口陽一・石川健治・蟻川恒正・宍戸常寿・木村草太『憲法を学問する』として、今年の憲法記念日に有斐閣から公刊されています。</p> <p>そして、続編を期待する多くの参加者の声に背中を押していただき、今年も「憲法を学問するⅣ」を開催する運びとなりました。これまでの「学説」・「判例」・「人と事件」をテーマとして、学界のレジェンド樋口陽一先生を中心に語り合ってきた前3回とは異なり、今次のセミナーでは、来たるべきポスト現代の憲法状況に対して、日本国憲法の掲げる近代立憲主義はいかに立ち向かうべきかを、われわれ講師4人が参加者とともに考えていきます。</p> <p>そのために、これから議論の軸になると思われる、4つの論点が精選されました。講師はそれぞれ、既発表の著書論文とできるだけ重ならないテーマを選ぶようにしましたので、ここでしか聴けない議論が展開されるはずですが、一見抽象度の高い問題設定のようですが、いわゆる「改憲」の論点を、より広い視野から考えるためには、不可欠のものばかりです。参加者の方々には、分科会や夕食・フリートークの時間に、ふだん感じている率直な疑問や、生活実感に基づく具体的な問題を、どんどん出していただきたいと思います。</p> <p>「近代立憲主義とポスト現代国家」ときいて、よく似た題名の本を思い浮かべた方、呈示された4つの主題にピンときた方、フーンと思っただけの方、みなさん大歓迎です。多くの方々の積極的なご参加を期待してやみません。</p>										
講師	樋口 陽一 (東京大学名誉教授・東北大学名誉教授) 石川 健治 (東京大学法学部教授)** 蟻川 恒正 (日本大学大学院法務研究科教授)** 木村 草太 (首都大学東京法学系教授)** 宍戸 常寿 (東京大学法学部教授)**										
定員	50名										
参加者	49名										
アンケート結果	<p style="text-align: center;"><b>セミナーの満足度</b></p> <table border="1"> <caption>アンケート結果 (満足度)</caption> <thead> <tr> <th>満足度</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>満足</td> <td>87%</td> </tr> <tr> <td>どちらかという満足</td> <td>13%</td> </tr> <tr> <td>どちらかという不満</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>不満</td> <td>0%</td> </tr> </tbody> </table>	満足度	割合	満足	87%	どちらかという満足	13%	どちらかという不満	0%	不満	0%
満足度	割合										
満足	87%										
どちらかという満足	13%										
どちらかという不満	0%										
不満	0%										

\*\*印は企画委員を兼ねた講師

事業名	第2回現代中国理解セミナー										
期日	12月7日(土)～12月8日(日)										
主題	世界の中の中国と日本-現代中国理解Ⅱ										
対象	大学生、社会人										
趣旨	<p>現在、世界は大きな転換期にあるのかもしれませんが。米中対立は、覇権交代の可能性を視野に入れたものでしょうし、論点の核心のひとつは技術に置かれています。中国は確かに西洋近代がもたらした多様な制度や価値に対して、新たな問題提起をしています。しかし、中国を例外、特殊として既存の秩序の埒外において事足りるということでもなく、中国の提起する諸問題を受け入れ、同調する国や人々もいます。もちろん変化しているのは中国だけではなく、アメリカも、そして日本も変化しています。こうした新たな世界の変化を踏まえ、昨年引き続き、中国について、また日本や東アジアについて一緒に考える場を設けたいと思います。具体的には、その中国を内政、外交、経済、社会から考察し、日本の中国への関わり方をあらためて考えたいと思います。</p>										
講師	<p>川島 真(東京大学 教授)**          小嶋 華津子(慶應義塾大学 教授**)          金野 純(学習院女子大学 教授)**          内藤 二郎(大東文化大学 教授)**</p>										
定員	40名										
参加者	46名										
アンケート結果	<p style="text-align: center;"><b>セミナーの満足度</b></p> <table border="1"> <caption>アンケート結果のデータ</caption> <thead> <tr> <th>満足度</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>満足</td> <td>80%</td> </tr> <tr> <td>どちらかという満足</td> <td>11%</td> </tr> <tr> <td>どちらかという不満</td> <td>3%</td> </tr> <tr> <td>無回答</td> <td>6%</td> </tr> </tbody> </table>	満足度	割合	満足	80%	どちらかという満足	11%	どちらかという不満	3%	無回答	6%
満足度	割合										
満足	80%										
どちらかという満足	11%										
どちらかという不満	3%										
無回答	6%										

\*\*印は企画委員を兼ねた講師

事業名	第8回EUセミナー												
期日	12月13日(金)～12月15日(日)												
主題	再生するEUと世界												
対象	大学生、社会人												
趣旨	EUはその幹部の任期満了に伴い、秋から新体制になります。トランプ政権のアメリカ第一主義に翻弄される世界ですが、10月末を期限とするイギリスのEU離脱、米国との関税摩擦、イラン核合意問題に直面しながら、EUは新たに共通防衛政策や共通予算などの次の統合段階に進もうとしています。新しい布陣となったEUは今後どのように進んでいくのでしょうか。皆さんと考えたいと思います。												
講師	渡邊 啓貴(帝京大学法学部教授、東京外国語大学名誉教授)** 田中 素香(中央大学経済研究所客員研究員、東北大学名誉教授)** 太田 瑞希子(亜細亜大学国際学部講師)** 福田 耕治(早稲田大学政治経済学術院教授)** 武田 健(東海大学政治経済学部講師)** 小久保 康之(東洋英和女学院大学国際社会学部長・教授)** 蓮見 雄(立教大学経済学部教授)** 明田 ゆかり(獨協大学経済学部非常勤講師・元外務省経済局国際経済課課長補佐)												
定員	70名												
参加者	65名												
アンケート結果	<p style="text-align: center;"><b>セミナーの満足度</b></p> <table border="1"> <caption>アンケート結果 (満足度)</caption> <thead> <tr> <th>満足度</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>満足</td> <td>53%</td> </tr> <tr> <td>どちらかといと満足</td> <td>40%</td> </tr> <tr> <td>どちらかといと不満</td> <td>5%</td> </tr> <tr> <td>不満</td> <td>2%</td> </tr> <tr> <td>わからない</td> <td>0%</td> </tr> </tbody> </table>	満足度	割合	満足	53%	どちらかといと満足	40%	どちらかといと不満	5%	不満	2%	わからない	0%
満足度	割合												
満足	53%												
どちらかといと満足	40%												
どちらかといと不満	5%												
不満	2%												
わからない	0%												

事業名	第9回新任教員研修セミナー										
期日	9月2日(月)～9月4日(水)										
主題	アクティブ・ラーニング、その導入から深化へ										
対象	教職員										
趣旨	<p>近年の日本の大学教育では、たしかな知識や技能を身につけるとともに、分野や立場の違いを超えて協働することのできる知性を育むことが求められています。また、激しい変化の時代を豊かに生き、社会に貢献していく能力の基盤となるような、学び続ける姿勢や力を培う教育も切実に希求されています。こうしたかつてないほどの期待と要求に応えるべく、多くの大学に導入されたのがアクティブ・ラーニングであることは言うまでもありません。しかし、そうした学びを引き出していくべきわたしたち大学教員の理解やスキルは必ずしも十分ではない、というのが実感ではないでしょうか。</p> <p>アクティブ・ラーニングは、導入から量的な拡大という段階を経て、今まさに質的深化が問われる時代へと突入しています。そうした深化に資するために、本セミナーでは、アクティブ・ラーニングを円滑かつ効果的に実施する上で不可欠な相互理解や人間関係の構築に始まり、発達障害などの困難を抱えた学生への対応に至るまで、アクティブ・ラーニングの基礎、理論、授業設計、様々な実例などを3日間にわたって体験的に学び、参加者がそれぞれ担当している授業を質的に深化させる機会を提供します。</p> <p>大学セミナーハウスは、大学教員相互の交流を図ることによってわが国の大学教育の向上・発展に寄与することを目的としており、今年度も学術・文化・産業ネットワーク多摩との共催で国公立大学の枠を越えた合宿形式の新任教員研修セミナーを企画しました。みなさまのご参加を心よりお待ちしております。</p>										
講師	菊地滋夫(明星大学副学長・人文学部教授)** 諏訪茂樹(東京女子医科大学看護学部准教授)** 藤井恒人(東京農工大学グローバル教育院教授)** 福山佑樹(明星大学明星教育センター特任准教授)** 伏木田稚子(首都大学東京大学教育センター准教授)** 佐藤順子(SPAファシリテーター) 榎原暢久(芝浦工業大学教育イノベーション推進センター教授) 村山光子(明星大学次長・明星学苑府中校事務長)										
定員	40名										
参加者	29名										
アンケート結果	<p style="text-align: center;"><b>セミナーの満足度</b></p> <table border="1"> <caption>アンケート結果のデータ</caption> <thead> <tr> <th>満足度</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>満足</td> <td>85%</td> </tr> <tr> <td>どちらかというと満足</td> <td>15%</td> </tr> <tr> <td>どちらかというと不満</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>不満</td> <td>0%</td> </tr> </tbody> </table>	満足度	割合	満足	85%	どちらかというと満足	15%	どちらかというと不満	0%	不満	0%
満足度	割合										
満足	85%										
どちらかというと満足	15%										
どちらかというと不満	0%										
不満	0%										

\*\*印は運営委員を兼ねた講師

事業名	第 39 回大学職員セミナー										
期日	7 月 5 日（金）										
主題	大学を牽引する職員を目指して-大学とスポーツを考える I										
対象	教職員										
趣旨	<p>東京オリンピック 2020 を目前にして、「スポーツ」への注目度がより高まりをみせています。そうした中で、自校のブランディング強化策として重点化を行う大学や、スポーツアドミニストレーション組織の整備に取り組む大学、「スポーツマネジメント」を教育プログラムに積極的に活用しようとする大学等、「スポーツ」と「大学」の関わりはより密接になっています。</p> <p>また、日本版NCAAと言われる「一般社団法人大学スポーツ協会」（“UNIVAS”）が設置され、多様な視点から様々な見解が述べられています。あらためて「大学」と「スポーツ」のありかたを見つめ直し、大学職員としてどのように関わっていくべきか、スポーツの持つ「健全性」や「素晴らしさ」をどのように大学の活動に結びつけていくかを考えたいと思います。</p>										
講師	<p>近藤清之(法政大学常務理事)*</p> <p>青木加奈子(高崎経済大学教育グループキャリア支援チーム)*</p> <p>大久保陽造(中央大学入学センター入学企画課課長)*</p> <p>加藤毅(筑波大学大学研究センター准教授) *</p> <p>黒田絵里香(慶應義塾塾監局総務部課長・協生環境推進室事務長)*</p> <p>杉本龍勇(法政大学経済学部教授)</p>										
定員	80 名										
参加者	45 名										
アンケート結果	<p style="text-align: center;"><b>セミナーの満足度</b></p> <table border="1"> <caption>アンケート結果</caption> <thead> <tr> <th>満足度</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>満足</td> <td>53%</td> </tr> <tr> <td>どちらかという満足</td> <td>31%</td> </tr> <tr> <td>無回答</td> <td>16%</td> </tr> <tr> <td>不満</td> <td>0%</td> </tr> </tbody> </table>	満足度	割合	満足	53%	どちらかという満足	31%	無回答	16%	不満	0%
満足度	割合										
満足	53%										
どちらかという満足	31%										
無回答	16%										
不満	0%										

\*印は企画委員



事業名	第 40 回大学職員セミナー														
期日	9 月 20 日（金）～9 月 21 日（土）														
主題	大学を牽引する職員を目指して-大学とスポーツを考えるⅡ														
対象	教職員														
趣旨	<p>東京オリンピック 2020 を目前にして、「スポーツ」への注目度がより高まりをみせている中、自校のブランディング強化策として重点化を行う大学や、スポーツアドミニストレーション組織の整備に取り組む大学、「スポーツマネジメント」を教育プログラムに積極的に活用しようとする大学等「スポーツ」と「大学」の関わりはより密接になっています。</p> <p>また、日本版 NCAA と言われる「一般社団法人大学スポーツ協会」（“UNIVAS”）が設置され、大学スポーツを取り巻く環境が変わろうとしています。このタイミングに本セミナーでは、私たち大学で働く立場で立ち返って、大学スポーツの意味、意義を考えてみる機会を持ちたいと思います。大学におけるスポーツ競技団体(所謂“体育会”)は課外活動団体として位置付けられ、その予算や安全管理、指導者養成は部に任されている大学が未だ多いと思います。大学におけるスポーツの意義や、大学と部の関係を明示している大学は少ないのが実情でしょう。あらためて「大学」と「スポーツ」のありかたを見つめ直し、大学職員としてどのように関わっていくべきか、スポーツの持つ「健全性」や「素晴らしさ」をどのように大学の活動に結びつけていくかを考えたいと思います。</p> <p>第 39 回セミナー（7 月 5 日開催於法政大学）を「大学とスポーツ」の関係性について見直す契機と位置づけ、第 40 回の当セミナーはこのテーマをより掘り下げ、「スポーツ振興の社会的意義」を大学スポーツの現場で起きている課題を踏まえ、考えていきたいと思ひます。</p>														
講師	<p>近藤清之(法政大学常務理事)*</p> <p>青木加奈子(高崎経済大学教育グループキャリア支援チーム)*</p> <p>大久保陽造(中央大学入学センター入学企画課課長)*</p> <p>加藤毅(筑波大学大学研究センター准教授)*</p> <p>黒田絵里香(慶應義塾塾監局総務部課長・協生環境推進室事務長)*</p> <p>山田晋三(筑波大学アスレチックデパートメント副アスレチックディレクター)</p> <p>木下澄雄(中央大学募金事業局部長：陸上部前総監督)</p> <p>増田昌幸(法政大学保健体育部市ヶ谷保健体育課長：フェンシング部コーチ)</p> <p>木村真人(東海大学スポーツ教育センター学園スポーツ振興課長：バスケットボール部統括コーチ)</p>														
定員	40 名														
参加者	13 名														
アンケート結果	<p style="text-align: center;"><b>セミナーの満足度</b></p> <table border="1"> <caption>アンケート結果の満足度</caption> <thead> <tr> <th>満足度</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>満足</td> <td>23%</td> </tr> <tr> <td>どちらかという満足</td> <td>54%</td> </tr> <tr> <td>どちらかという不満</td> <td>7%</td> </tr> <tr> <td>不満</td> <td>8%</td> </tr> <tr> <td>分からない</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>無回答</td> <td>8%</td> </tr> </tbody> </table>	満足度	割合	満足	23%	どちらかという満足	54%	どちらかという不満	7%	不満	8%	分からない	0%	無回答	8%
満足度	割合														
満足	23%														
どちらかという満足	54%														
どちらかという不満	7%														
不満	8%														
分からない	0%														
無回答	8%														

\*印は企画委員

事業名	古田武彦記念古代史セミナー2019												
期日	11月9日(土)～11月10日(日)												
主題	古田武彦記念古代史セミナー2019												
対象	社会人												
趣旨	<p>2004年から2014年まで、毎年11月上旬に、八王子の大学セミナーハウスに古田武彦先生をお招きして、1泊2日の「古代史セミナー～古田武彦先生を囲んで～日本古代史新考 自由自在」を開催致しました。その内容は『TAGEN』、『東京古田会ニュース』、『古田史学会報』等に報告されています。更に、2004年から2012年までの内容は、平松健氏によってテーマ別に整理し直して編集され『古田武彦が語る多元史観』（ミネルヴァ書房）として刊行されています。その「はしがき」において古田先生は、「我が国の歴史教育を真実に戻すことが、この一書の役割である」と絶賛していらっしゃいます。また、セミナーの様子は西坂久和氏により完全収録され、西坂ビデオライブラリーに収められており、古田先生のあの情熱溢れるセミナーの様子はいつでも再現することが出来ます。</p> <p>あのセミナーの内容は、研究者達から「八王子セミナー」として頻繁に引用され続けています。このことは、あのセミナーの内容が豊富であり、学術的に重要であったことの証です。主催した者としては、これに勝る喜びはありません。</p> <p>古田武彦先生がお亡くなりになって3年半が経過しましたが、この間も、直接/間接に古田先生に学んだ古代史学の研究者達による研究が活発に進展し続けていることは悦ばしい限りです。</p> <p>古田先生の研究方法による古代史学の学会が複数存在し、それぞれが活発に活動を続けていますが、研究者達が学会を超えて一堂に会し、「～古田武彦先生を囲んで～」研究交流をすることに意義があると考え、昨年、あの「八王子セミナー」と同じ場所で、同じ時期に、同じ日程で「古田武彦記念古代史セミナー2018」を開催しました。その趣旨は、「～古田武彦先生を囲んで～」古代史学の現状と発展の方向を確認する、その心は、古代史学の研究を進めるに当たっては、古田先生の研究方法と業績を踏まえることが重要であると考えたからです。</p> <p>今年も同じ趣旨のセミナーを開催致します。このセミナーにおいて、「古代史学における古田先生の研究方法と業績を再確認」しながら、活発な研究交流が行われることを期待しています。更に、このセミナーは、研究者のみならず、古代史に関心を持つ全ての人を歓迎します。このセミナーが、若い人々が真実の古代を覗く窓になれば幸いです。</p> <p>このセミナーは、大学セミナーハウスと多元的古代研究会、東京古田会、古田史学の会及び古田史学の会・東海が共同で開催致します。</p>												
講師	荻上紘一* 大墨 伸明* 荻野谷正博* 橘高 修* 西坂 久和* 富川ケイ子* 和田 昌美* 藤尾慎一郎(国立歴史民俗博物館教授・総合研究大学院大学教授)												
定員	60名												
参加者	64名												
アンケート結果	<p style="text-align: center;"><b>セミナーの満足度</b></p> <table border="1"> <caption>アンケート結果の満足度</caption> <thead> <tr> <th>満足度</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>満足</td> <td>25%</td> </tr> <tr> <td>どちらかという満足</td> <td>39%</td> </tr> <tr> <td>どちらかという不満</td> <td>25%</td> </tr> <tr> <td>無回答</td> <td>11%</td> </tr> <tr> <td>不満</td> <td>0%</td> </tr> </tbody> </table>	満足度	割合	満足	25%	どちらかという満足	39%	どちらかという不満	25%	無回答	11%	不満	0%
満足度	割合												
満足	25%												
どちらかという満足	39%												
どちらかという不満	25%												
無回答	11%												
不満	0%												

\*印は実行委員

2019 年度事業報告 附属明細書3 留学生会館入居状況

1.2020 年 3 月 31 日現在入居状況

学校名	所属			計	性別	
	大学院生 (研究生を 含む)	学部生	客員研究員		男	女
首都大学東京	1	6		7	4	3
東京工科大学		4		4	3	1
合計	1	10		11	7	4

2.国別留学生数

国名	計	大学院生	学部生	客員研究員
インドネシア	1		1	
インド	1		1	
韓国	2		2	
中国	2	1	1	
フランス	4		4	
ベトナム	1		1	

## 2019 年度事業報告 附属明細書4 留学生論文の表彰に関する事項

留学生論文コンクールは留学生の日本語による論文作成能力を向上させる機会を提供するとともに、日本留学の成果を発信し、国際相互理解及び国際交流を促進することを目的に平成21年度から実施している。今年度は全国37大学の留学生(出身国は6カ国)から54作品の応募があり、下記のとおり受賞者6名が決定した。

1、応募作品数:54 作品

2、応募者内訳

(1)大学数:37 大学

(2)国籍:6 カ国

3、入賞作品一覧

賞別	氏名	大学名	国籍	論題
金	潘 東晨	山口県立大学	中国	発展途上国においても科学的で効率的なごみ分別システムを整備する
銀	陳 茜	東京外国語大学	中国	テクノロジーによる食料危機の打開策
銀	倪 樂飛	広島大学	中国	AI 技術の夢を如何に見るか
銅	吳 佩珍	神戸女子大学	中国	国際結婚における偽装結婚の問題点と対処
銅	EVELIN	駒澤大学	インドネシア	食料主権を考える
銅	練 詩安	金沢大学	マレーシア	無形文化遺産「言語」の消滅危機
奨励	謝 鋼鋒	星槎道都大学	中国	少子高齢化問題